無論量は極めて微少であるが、その味覺の鋭敏さと、胃袋の强健さは到底病牀の人とは見えない。その上、晩には新潮社の牛肉を喰べるんだと樂みにして居る。僕も隨分多數の同病患者に接して見たが、この元氣とこの食氣に勝さる病人を見た事が無い。何にしても結構である。

八時頃茅ヶ崎館に着く。獨酌三合。寂しく寢た。近くとも旅は旅である。夜中も目が醒めて困つた。今朝、曉の四時頃風の音に驚かされて、仄暗い朝闇の中を上草履のまゝ海岸に出て見た。海も陸も未だ眠つて居る。風は松林に麥畑に唸り叫んで、直ぐ下の小松原の上に赫笛のやうに幽かに響くのもある。南湖院の第三病室はその薄暗の中にボンヤリ白く見えた。

歸つて行燈の下にこの書を書く。書終れば五時、窓は明るい。ほかの鳥は未だ啼かぬのに、雲雀の高音が耳近く聞える。（五月九日朝。茅ヶ崎館にて）

第二信

昨日朝九時病院を訪ふ、閑談三時間。午後は四時頃より二時間ほど。夜晩く寢衣の帶に大提灯をぶら提げて行つたら、その姿辻占賣に似たりと笑はれた。月はあつても退潮時の黑い洲潟を唯一人歸るのは、流石に好い心持は無かつた。砂地に草履、足音の無いのも實に不氣味なものだ。

旅館と病院との間は小半里弱もある。富士山を正面の標的として海岸づたひに行くと自然に南湖院の裏門に出る。好い運動だ。前の手紙に、旅館の濱から、病院の白堊を見たと書いたが、大間違、實際は餘所の別莊を朝闇に迷うたのと知れた。

病人は相變らず元氣である。好く喋り、好く喰べ、癇癪も好く起す。これが病人かと見て居て小面憎（こづらにく）くなる時もある。僕はこれまで幾多の同病者を扱つたが、こんな餘裕のある病人を見た事がない。同じ癇癪を起すにしても、眞に、何の見境も無く、泣き喚き悶え狂ふので、獨步氏の如く五分の愛嬌と洒落氣を藏して居た者は無い。餘裕があるのだ。僕の父なぞは、怒れば唯怒り、泣けば唯泣き、妬婦の怒るが如く怒り泣いたものだ。自己の苦痛以外に自己を遊離さす事が出來なかつたのだと思ふ。何しろ、これで獨步氏自身も看護婦も大助かりに助かる。

これはその一例である。今の所、一日中の最苦患時は、午後三四時頃から夕方までの間らしい。定型通り哺熱が九度近く出る。從つて咳嗽は頻出する、呼吸は促迫する。一度咳入り出したら二時間位は治らぬ。烈しい時は嘔吐まで加はる。顏を眞赤に靜脈を怒張さしてギク〳〵と苦しむ。咽頭を鳴らしてセイ〳〵云つてる。見て居る方がその慘（みじめ）さに耐らぬ。それでも注射は厭だと云ふから、他に手の盡くしやうは無いのだ。自然に治るのを待つより外に無い。當人も

この時ばかりは甚く悲觀して了つて、つい心細い事も悲しい愚痴もこぼす。癇癪は絶頂まで上り詰める。

昨日のそれは丁度五時頃であつた。所がその苦患の眞最中、股間の爛爛部が痒癢に堪へぬと言出して、亞鉛華軟膏を貼布する段になり、「痛く無いな、屹度痛く無いな。」と念を押しながら貼つて貰つた所、何うして〳〵飛び上がる程の大痛み、病人はあつと叫んで窘んで了つた。さア憤るまい事か痛く無いと保證するから貼つたのだ、痛む位なら死んでも痒癢を我慢すると大立腹にて拳骨がやたらに飛ぶ。傍の人見かねて「ぢや剝しませう。」「いや剝したつて駄目だ。」「ぢや何うすれや好いのです。」「何うもしなくつて好い。」「困るぢやありませんか。」「俺も困る。」と駄々ッ兒の押問答、精一杯の我儘を云つて居るかと思ふ内に、ケロリと忘れた顔になつて、「あゝ、お蔭樣で痛くも痒くも無い。」それに今の拳骨騷ぎで咳嗽がスッカリ止つた、難有う。」と濟したもの。文句は忘れたが、何かこの場合に最も適切な警句を吐いて、自分から可笑しさうに高笑ひして居る。これでは傍の人も笑ふより外に無い。後ちに聞くと、自分も一度は眞に憤つて見るのだが、中途に偶と滑稽な警句が思付く、さアそれが云ひたくなる、然うすると今まで憤つた事はケロリと忘れて了つて、自分が先づ噴出して了ふのだと云ふ。だから世間では氏を非常な癇癪持らしく云ふが、事實その癇癪たるや、極めて餘裕のある滑稽に富んだ面白い癇癪で、普通病人の癇癪とは餘程質が違ふ。兎に角人の悪い病人だ。（五月十日）

第三信

獨歩氏の近狀と申せば、相變らずと云ふの外は無い。何うせ長びく病氣の事ゆゑ、相變らぬのを第一の結構として、氣永く快癒を待つの外はあるまいと思ふ。

獨歩氏目下の仕事は喰べる事と喋べる事の二つである。以外の事は思つたとて當分出來やう筈は無いのだ。當人も亦その二つを日課とも慰藉ともして居る。何か變つた御馳走があるとか、東京から訪問者があるとか、手紙が來るとかすると、最う小兒のやうに覿面に勇み喜ぶ。見舞狀がドッサリ來た日は一日機嫌が好いが、手紙も來ず御馳走も無いとなると、スッカリ悄げ切つて了つて、「所詮助ら無い」の、「最う長い生命でない。」のと、悲しい愚痴ばかり並べ立て、傍の人々を困らせて居る。無理も無い事、今の場合外界との交渉は唯この二つより外には無いのだ。

病症が病症ゆゑ、藥餌を以つて根本的の治療を爲すは到底覺束ない事である。藥餌は藥餌として對症的に投ずるのみ、バチルスの根本的撲滅は健全なる血清と新鮮なる空氣の自然療法に

俟つの外は無い。高田院長も恐らくはその目的らしく、營養の攝取を專らに推奬して居る。幸に胃袋が强盛ゆゑ、味覺も消化も鋭敏で、食慾の衰へぬのが何よりである。僕はこの一事に多大の希望を置いて看病して居る。

試みに看護日誌に據つて、過去十日間の攝取營養量を御報告すれば、左の通りである。

五月一日。晝夜共氣分不良。食養一日合計、軟飯二椀、牛乳二合、易消化物。卵一箇、パン半斤。睡眠五時間。

五月二日。氣分、晝常、夜常、食養、肉汁二百瓦、軟飯三椀、牛乳二合、易消化物、卵二箇、パン半斤餘。睡眠七時間。

五月三日、氣分不良。食養、軟飯三椀、牛乳一合五勺、易消化物、卵二箇、パン半斤。睡眠三時間。

五月四日。氣分不良。食養、軟飯三椀半、肉汁二百瓦、卵黄五箇、牛乳二合、睡眠六時間。

五月五日。氣分常。食養、飯二椀、牛乳三合五勺、卵黄二箇、水菓子。睡眠半醒半覺六時間。

五月六日。氣分良。食養、軟飯五椀、牛乳二合、肉汁二百瓦、卵六箇、易消化物。睡眠六時間。

五月七日。氣分常。食養、軟飯四椀半、牛乳一合、肉汁二百瓦、易消化物、卵五箇。睡眠六時間。

五月八日。氣分常。食養、軟飯四椀、易消化物、卵五箇、肉汁二百瓦、牛乳。睡眠四時間。

五月九日。氣分良。食養、軟飯五椀、肉汁二百瓦、牛肉二皿半、魚一皿、野菜少。睡眠六時間。

五月十日。氣分良。食養、飯五椀半、牛肉一皿半、パン半斤、野菜一皿、卵二箇、牛乳一合、肉汁二百瓦。睡眠六時間。

以上の中、肉汁とあるは牛肉を壓搾したる水樣營養分にてその二百瓦を得んには略二斤の牛肉を潰す。易消化物とあるは普通調理のおかずである。そして、日誌に記載せるは何れも一日の主食のみであつて、この外果實菓子その他の間食の量も少くは無い。

間食、卽ち嗜好品として獨歩氏の最も好むもの、第一は果實、鰻の蒲燒、牛のヒレ肉等である。珍らしい物なら何んでも喜ぶけれども、特に以上の三種を好む。それと云ふも一つは此邊りにて求め得ぬと、貯藏に困難なる爲め常に得難いからもある。果實は特に贅澤の限りをつくして、泉屋の苺とか、亞米利加產の葡萄とか、そんな物でなければ喰はぬ。始終噂に出るのは何所の鰻、何所の牛肉などにて、この二つは餘程好物らしい。この頃も橘香君に託されて最上のヒレ肉を持つて來たら、それは最う非常な喜びやうで、誰にも手を付けさせず、唯一人で三

日間にペロリと平げて了ひ、「ああ旨かつた、最う牛肉も無くなつたが、明日から何を喰べよう。」と切りとその心配ばかりして居る。大船の押し鮨も好きである。

食物に次ぎて喜ぶは東京よりの訪問客。これは一度訪問せる人の總て經驗する所であるが、手紙を待つ事も亦切りである。毎日、毎夕、郵便の配達時になると、首をのべてそれのみを待つて居る。見舞狀や繪はがきの多く來た日は、急に元氣づいて、少々の熱なぞ忘れて讀耽ける。花やしきや南洲銅像の粗末な繪はがきまで急には手を離さず、事珍らしさうに眺め入つて、目と心を喜ばせて居る。

こゝまで書掛けた所へ病院行きの車屋が來た。何れ委細の御通知は後に申上げる事とする。

一昨日來の降雨、海濱の雨は又特別寂しく寒むい。（十二日）

第四信

十一日附の御書面昨朝到着。獨り讀むは惜しく、早速病人に讀んで聞かせた所、小栗だよ〳〵と喜んで居た。外に獨歩氏宛の繪はがきも面白かつたが、あゝ番毎僕の顏をポンチにされるは閉口なり。髯があれば熊、髯を剃れば栗の毬、何方にしても酷い。

肋膜炎は未だ退かぬ。摩擦音が高い。尤も乾性の方ゆゑ滲水物は無いが、さらでも弱き呼吸を障害するには困る。昨日の午後はその呼吸困難で大苦悶、メンタの濕布に幾らか緩和されたやうであるが、一時は傍で見るも慘めな程であつた。あの我慢な病人があの大嫌ひな注射を醫師に求めた位だから、よくせきの事であつたらうと思ふ。尤も一つは肋間神經痛も手傳つたらしく、嘗て同病を患つた事があると云ふし、筋肉の痙攣の狀態、疼痛の發作性な鹽梅、何うも肋膜炎の所爲とばかりは思はれぬ。果して、神經痛なりとせば大した心配は無く、苦痛は烈しくとも一時的のものゆゑ、然う病勢に影響するやうな事はあるまい。何しろ此所二三日は大事な峠である。この場合肋膜炎が增進するやうでは實に困る。

昨日、その病苦の眞最中、朝に讀んだ先生の書面を思出して、小栗が今度出す風葉集の序文を書きたい、眞山君ノオトの用意をしてくれ給へと云ふ。呼吸困難の最高潮時で、顏面は鬱血せる如く眞赤、肩を刻む表層性の呼吸音が荒らく聞える、水泡音も手に取るやうだ。で僕は、何も然う急ぐ程の事は無い、氣分が恢復した後になさいと止めたら、餘程切なかつたと見え、然うかと穩なしく思留つた。そんな次第だから、序文は其中機を見て書いて貰ふ事にする。この肋膜炎の瀨戸を越さない間は駄目だ。

僕はこの十日ばかり獨歩氏の枕側に坐して、多大の利益と啓發とを得た。何より尊い賜物を

得た。人生と藝術に對する眞摯なる態度がその一、藝術を以つて天下の師たらんとする志がその二、窮迫不滿に處する自恃心がその三。この三つは常に聞き常に云ふ陳套の文字ではあるが、これを獨歩その人の口に聞き聲に見る時、初めて、甞て思はざりし權威と重壓の身邊近く薄るを覺える。或時は火の、血のパブテスマを享ける如く心が興奮する。嗚呼、今にして獨歩氏に逢ふ事の餘りに晩かりし吾心の頑を恥ぢ慨く。

雨はやつと上つた。濱には地曳網が見える。一日も早く來られん事を、病人も僕も切望して居る。（十三日朝）

第五信

昨日僕が晝飯に歸つた後で、病人は寢臺を下りたさうだ。壁際に暫らく靜坐した上、人に扶けられて廊下を出で、海を漾はす雲影を見たとのことである。僕此地に來て小半月、寢臺を下りたのは今度始めてだ。皆大喜びである。

肋膜炎は心配した程の事は無い。メンタ濕布が餘程利いて、昨日は甚しく苦痛も訴へない。神經痛も頓挫したらしい。だが何分この三四日來苦悶の結果、身體は頗る疲勞して居る。喋る元氣も弱つた。然し追々天候も恢復し、この疲勞も調整したならば、又一段元氣を增すだらう、それを賴んで居る。

病人も恢復の自信を確く持するやうになつた。冗談ながら、早く癒つて茅ヶ崎館までお出掛なさい、田山先生や風葉先生や其他大勢集つて、陽氣に酒を飲んで見せると云つたら、僕は何うするんだ、指を咥へて見て居るのかと聞く。恢復しても貴方は病人だ、平野水でも飲んで被在い。それは慘酷だ、せめて一滴でも好いからウヰスキーを混ぜてくれ、そして僕も騒ぐよ、厭な事ッた、僕一人病人扱ひされるのは、と大笑ひになる。早く然うしたいものだ。餘病さへ併發せねば、その位の事は何んでも無い。院長高田氏も獨歩氏の病氣輕快を待つて、『二十八人集』の二十八人を招いで小園遊會でも催して見たいと云つてるさうだ。

註文して置いた鮮魚が來た。早く病人に見せたい、今日はこれだけで筆を擱く。（五月十四日）

第六信

その後通信を怠つた理由は過日も手紙で申上げた通りである。一時は斷然この地を引揚げやうかとも思つた。然し、考へて見れば病人には何の關係もないことだ、二三日東京へ歸つてさ

へ甚く寂しがるもの、それを棄てゝ去るに忍びない。人は何とも云へ、僕は飽迄最初の決心を守つて何時までも——獨歩氏があれほど念願して居る柳島の釣ぐらゐ出來るまでは、當地に居留まる覺悟を決めた。斯うなりや病氣と首ッ引だ。

近頃は格別腹も立たない。

咯血は全く止つた。その後三四日間は多少の血痰も見たが、一昨日頃からは血點血線の痕跡すら全く認めない。患部の氷嚢を撤してもよいと院長の許可が出た。面會謝絶も長い辛抱ではあるまいと思ふ。

家族　付添の人々、僕等に至るまで、今度ほど痛心苦慮した事は無い。衰弱疲憊の後ではあり、特にあの神經質な病人ゆゑ、爲めに如何なる變徴を來さぬとも限らぬと、二三日は全く顚動の姿であつた。

獨歩氏の血を怖るゝの甚だしい話は、兼々人にも聞き自分にも云つて居る。僕アこれで多量の出血でもあれば、血に驚いて忽ち卒倒するだらう、とは始終口癖に云つて居るところである。又僕等も何ぞと云ふと、咯血が無いから大丈夫だ、これに咯血でもあつて御覽なさいと、呼吸困難なぞある毎に、然う云つては慰め勵したものだ。獨歩氏の肺病は熱發性で、發病以來殆んど咯血を見ないのである。それに今度の咯血だ。奥様の話にはコップに二杯以上もあつたと云ふ。

その晩の事を申上げよう。

今思へばその日は朝から變だつた。いや二三日前から樣子が變つて居た。口を利くのも妙に億劫さうで、話をしかけても碌に返事もない。食慾も進まぬ。ボンヤリ仰向いて無力性に一所を見詰めて居る。で、これは、日頃來の疲勞が出て平穩無爲を欲して居られるのだとばかり思つたゆゑ、僕等も餘り病床には近寄らぬやうに遠慮して居た。

三日は殊にも熱い快晴の日であつた。午前に行つて見るとウト〳〵睡つて居る樣子。これなら好いと、急に思立つて、武羅夫君をそゝのかして馬入川の富士を見物に病院を出た。序に買物なぞして平塚に行き、宿屋に歸つたのは午後の五時頃である。又病院とは思つたが、草臥れて居るので湯に入り飯をすまして、緣側にビールなぞ拔かせながら、靜かに暮れて行く海濱の夕暮を賞して居た。

處へ遽しく、一人の車夫が俥と手紙を持つて驅付けた。眞山樣、國木田とある。奥樣の手跡である。

慌てゝ封を切ると、長い手紙の中から一葉の紙片が落ちた。先づ、それから先きに拾つて讀む。手帳を引裂いて野紙に、

僕は遂に喀血した、今夜來ても面會謝絶ださうだ。

六月三日夜

眞山兄

と斯う鉛筆で書いてある、僕等はハッとして棒立ちになつた。

同時に涙がハラ〳〵と出る。胸が塞つた。默つて武羅夫君にそれを見せると「先生は絶望したらう。」とこれも聲が顫へた。

奥樣の手紙を見ると、今晩は病人を手放されぬ。別莊の方に泊つて子供を見てくれとの事。然し、矢張り餘程狼狽されたと見えて、同じ事を何度も書いたり、文字を走らせたりして、高高二三行で濟むものを、恐しく長々と丁寧に書いてある、後から考へると可笑しくてならぬ。

喀血そのものは何でも無いとしても、心配なのは獨歩氏の樣子である。かねての言葉、かねての神經質、例令昏倒しないまでも絶望自棄して居るに相違ない。好くこの手紙も書けたと、又紙片を取つて灯に翳して見ると例の淸勁な文字、鉛筆ながら邁氣踊躍して居る。慌てた戰顫も無い。僕は何と思つたか、態々押入を明けて鞄の底にそれを藏つた。

電報用紙、萬年筆、マッチ、綿入に綿入羽織、まるで野宿でもする用意で、行也迎への俥に飛乘つた。宿の女中などは呆氣に取られて居る。武羅夫君は尻ッ喘折に提灯をさげてその後を追駈けた。翌日きまりが悪かつた。

夜の八時過ぎ、病院はヒッソリと寢鎭つて、宿直室の灯ばかり明るい。松原、松の中を第三病室に駈付けて、第三病室の玄關へ入ると、鈴木さんと云ふ豫て見知り越しの看護婦長が、平服に着換へて病室の前を見廻つて居た。

「國木田さん喀血したさうですね。」と僕は突然尋ねた。その慌てかたが可笑しかつたのだらう、僕の顏を見て居た。

「然うお騷ぎなさるほどでもありません、最う止りました、今奥樣をお呼び申しますからこゝでお待ち下さい。」と、玄關脇の應接間の前で見事喰止められて了まつた。病室は全く鎭り返つて、安らかに眠る患者の鼾聲がそこゝに聞える。鈴木さんは長い廊下を足音忍んで靜かに行く。

灯がパッと射して、奥樣がソッと出て來られた。十一二も病室を距てゝ居るが、周圍が靜かな所以か、その扉を啓ける拍子に、コン〳〵と力なき獨歩氏の乾咳を聞いた。胸が躍つて、喉頭が我れ知らずコクリと鳴る。

「到頭喀血してよ。喫驚したわ。」と未だ聲が落付かぬ。

「先生は何うして居ます、嘸氣を落したでせう。」

「處が、それは不思議です。落付いたものよ。私どもの方が却つて笑はれたわ。」
「どの位。」
「コップに二杯、もつとあつたかも知れません。」
「眞逆」と鈴木さんが傍で笑つた。
僕は茲に、職分とは云ひながら、この際に於ける院長及び院醫諸氏の好適なる措置を厚く感謝せねばならぬ。斷然面會謝絶の札を戸口に貼出されたことである。僕は訪問者ではない、付添者として自由に病室に出入する事を豫てより默許されて居る者だ。この際立つた貼札が無ければ、屹度遠慮もなく飛込んだに相違ない。そして、如何なる見苦しい慌てざまを病人に見せたか分らない。爲めに病人を刺戟してどんな變徴を來させなかつたとも限らぬ。信念の爲めには一歩も假借せぬ院長の果斷を感謝する。殊に況んや、夜は深けたり、面會人と云つてもこの晩は僕等の外には無いのだ。
何れ、高田院長の好意と熱誠とに就きては、項を改めて通信する積りで居る。（六月十日）

第七信

四五日前また咯血があつた。やつと一オンスばかり、直ぐ止つた。今回は面會謝絶の貼札もなく、翌日から直ぐ粥を取ることを許された位だから決して心配する事は無い。その後の經過も誠に好く、血痰も順序好く減ずる鹽梅である。其前日神戸より令弟收二君が來られたので、歡喜の餘、幾らか病勢を刺戟したのかも知れない。何うも感情の激動が直ぐ身體に影響して困る。收二君は當分一週間位ゐ滯在の豫定なり、矢張り茅ヶ崎館に泊つて居る。昨日、令閨と令孃とが神戸より來られた。
『二十八人集』第四版の郵送と前後して、川上眉山氏の訃音が傳へられた。その朝行つたら獨歩氏は聲を顫はして、「川上君が死んださうだ。然し僕は何うしても事實と信ずる事は出來ぬ。僕の目には儼として生きて居る。この通知狀一本、新聞の記事ぐらゐを以つて、吾が心に活きつゝある川上亮その人を消し滅する事は出來ぬ。」と語りつゝ、切りと暗涙を飲んで居られた。そして枕頭の『二十八人集』を指しながら、僕は『二十八人集』を見る毎に嬉し泣きの涙が出る。病氣に氣も心も弱くなつたか、人の情が染々と骨髓に徹する。假令足は立たずとも、血を吐いても、僕に筆持つ元氣と精力さへ與へられたら、必らずこの友誼に酬ゆるだけの製作はする積りだ。骨よ碎けよ、血よ枯れよ、吾は吾が文人たる天職を最後まで竭くして、吾が友の篤き心に酬いねばならぬ。然るに、その酬ゆべき一人の川上君は最う居ない。

思へば去年十一月、首相招請會の席上に相隣りして語つたのは、川上君との最後の面會であつた。僕の病氣もさまで重からず、笑つて興じて物語つたその夜の記憶が、君と最後の記憶にならうとは誰が知らうぞ。斯うと知らば、僕はあの時更に語り、更に笑ひ、更に強き握手をするのであつた。常の如く會ひ、常の如く別れたのが、常の如からざる記憶となつて吾が心に殘る事となつた。嗚呼。

或る新聞は同氏の死因を、生活難のためと書いたが、僕は斷じて信じない。川上君はさまで自らを低く賤しくする人ではない。文人たるの矜を然う輕々しく拋棄する人では無い。また精神の異狀も或はあつたかも知れぬが、要するに藝術難が渠を殺したのだ。川上君の尊い性格はそこにある。何人も當然觸るゝべき味ふ可き藝術の惱みに悶えて自ら殺す事となつたのだ。この心、百部の傑作にもまさりて貴し。僕はこの尊敬すべき心事を、世間萬千の人に示してやりたいと思ふ。僕にしても、一念藝術の到り難きを思ふ毎に、恒に慄然として怖れ顫へ、吾が生の甚だ謂れなきを慨くのである。（十九日）

第八信

前に『二十八人集』に就きて申上げた。この機會を利用して、茲に同集に對する獨歩氏の衷情を詳しく述ぶる事とすべし。何んとなれば、病氣にかまけて、未だ親しく感謝の意も諸友に致さず、荏苒今日に到れるを悔むの言葉を常に聞くからである。今日の獨歩氏には、端書一通書くのさへ容易の事でない。

嘗て花袋氏と共に訪うた時、獨歩氏は斯う云はれた。「余は今にして快樂を極むる心の薄すかりしを悔む。身病み心衰ふると共に倍々その悔みの大なるを覺ゆ、誤解する勿れ、謂ゆる心の快樂とは、世に賤しき種類の快樂に非らず。義しき美しき快樂を指すなり。例へば、枕頭なるこの花を見よ。今の余の此爲めに慰められ、樂しましめらるゝ事幾何なるぞ。爲めに食を進め、痛を忘るゝ事すら往々にあり。されど、健康の日にありては、余は如何にしても大なる力と感化とをその中に認むるを得ざりき。花に對する吾が心他人の如く昏かりき。玉蕊、雲蕚、嫩色、艶葩、その形、その色、たゞ漫然と偶目一過するのみにて、嘗てその極を極め、その精を精ぶるの事をせざりき。食味嗜香總て斯くの如かりき。謬まれりよ。頑なりしよ。友を愛し人を愛するにも然かり。昔の我の情人を愛する如く、今の我の花に對する如くその精極を探り求めざりしぞ。求むれば卽ち與へらる。深かきを求むる心は深きを得る所以なり。恍惚として吾醉ふまで總ゆる快樂の極を探り求めざりしぞ。而して、今の吾が心は斯くの如し。病衰せりと笑ふ事

なかれ。余は友人等の篤き情を思ふ毎に、更らに自ら感情を強め鋭くして、飽迄その厚情のどん底までを味はんと欲す。余はこの集を見る毎に一種得も云はれぬ美しき涙を覺ゆ。これ疾病の余に與へたる賜物なり、賜物なり。余は今日にして初めて純なる感情を有つを得たり。」

この言葉を聞ける花袋氏の目に涙があつた。僕も暗然を覺えた。で、花袋氏が「然し然う感情を集冲しては身體が疲勞するだらう。」と強ひて笑ふと、獨歩氏も亦笑つて「いや疲れるには疲れるが、疲勞以上の歡喜があるよ。」と云つた。

其後、事毎にこの美しい感情が見られた。二版、三版、四版と改版毎に送り來る同書を枕頭に置きては、目を慰め心を怡しましめて居る。賣行きの好況を新潮社より申送り來るごとに、何時も聲を改めて世間の同情篤きを感謝して居られる。

「余は讀者を目して、單に品物を買つてくれるお得意樣とのみ思ふを得ず、余は常に讀者より物質以外の大なるプレセントを得つゝあり。その贈り物余には最も貴き力となれば奮勵の心ともなる。茫然たる孤影も世に讀者あり味方ありと思へば、吾生の廓寥を忘るゝに足る。」とは好く云ふ言葉である。

『二十八人集』一部。これを藝術的價値よりして幾何の價あるべきか、そは世既に定評あり、僕の如きをして更に言葉を加へしむる必要を認めぬ。されど、この一部が吾が尊崇する病文人を慰藉するの、斯の如く大なる一事に至つては、之を廣く寄稿の諸士讀者に傳へざるを得ない。世に廣く、且つ長く殘れよ、わが『二十八人集』よ。（六月十九日夜）

第九信

この通信こゝに終る。吾が崇拜する國木田獨歩氏は、今日――六月二十三日午後八時四十分、相州茅ヶ崎南湖院第三病室に瞑目せられた。

故人の遺志もあり、且つ家族の人々も屍體室に移すに忍びずとて、遺骸は收二氏と二人して、これを擔架に乘せて、雨後の眞黑な松、松原の中を別莊へと移した。別莊とは獨歩氏入院後家族等の假りに棲はれた海濱の小屋にて、同氏は一度も見られた事がない。屍となつて始めて自分の家に歸られたのだ。

この通信は、午後九時四十分、その六疊の一間、遺骸の枕頭に於いて書く。

旅の上、知る家はなし、夜は深けたり。屏風その他の用意も無い。軀を北枕に直して、蠟燭一基、香烟一鏤、白ハンケチを顏に獨歩氏は兩掌を胸に合はせて、白絣の浴衣のまゝ靜かに牀上に横はつて居る。

母堂まさ子、夫人治子、令弟收二氏、同夫人賛子、きみ子、寄果の六人、寂しく通夜す。令息令孃は嚴君の死も知らず、小さな蚊帳の中に眠つて居られる。

嗚呼獨歩氏逝く。明日は友人知己の人々も來らる可し。諸方に打電す。

明二十三日午後六時火葬、木葬は追つて東京にて營むべく略確定。（六月廿三日夜、同氏宅にて）

こは同夜書きたるものなれど、故ありて新聞には出さざりしなり。今併せ掲ぐ。

第十信

改めて書かざる可からざる一事がある。外ではない、この通信に就きてである。

僕一己より正直に云へば、僕はこの通信ほど反響多き文字を書いた事がない。嬉しいほど廣く讀まれた。來るほどの見舞客、見舞狀何れもこの拙なる通信文に多大の注意を拂つて居ると書いてある。又この通信文に依つて新しく見舞狀を送らるゝ人、日に四五通を下らず。病人も非常にそれを喜び、同通信休載の日は、新聞を見る氣も無しとて、僕の怠慢を酷しく叱責された。

然るに、近頃になりて、獨歩氏の死亡後、よく聞く非難は、寄果の通信を以つて見れば甚だ元氣に甚だ良好らしい。故にそれに油斷して見舞も怠り、甚だ殘念な事を爲せりとの非難である。僕と雖も明かにそを認めまする。御無理の無い事と思ふ。現に母堂の如きすら、臨終の夜、「眞山さんが大丈夫〳〵と受合ふから安心して居たのに、斯うなるなら早く聞かしてくれゝば好いに。」と大にお恨みを受けた次第である。

僕は五月初め高田院長より甚だ長からぬ事を宣告された。その後院醫其他より十日位、四五日位と云ふ話を度々聞いた。それを知りつゝ夫人にも話さず令弟にも多く話さゞりしは、一意唯家族の人々等の落膽せられん事を恐れたに外ならぬ。

通信の文も亦然り。獨歩氏は神經質の人、殊に病中はひどく鋭敏になつて、詰らぬ些事にも憤る樣子であつた。又自分も死の近きを知りながらも、他人より危篤の重症のと云はるゝを非常に畏れ且つ怒つた。嘗て某々新聞に死期の遠からぬと書かれた時の如き、實に甚しい憤激にて爲めに病症を增進せぬかと危んだ位である。

僕は殊更に病人を喜ばすべく、成るべくその好き方のみを聞かせ、惡しき方は聞かせぬやうに勉めたものだ。この通信は天下萬人に見せると云ふより、寧ろ獨歩氏一人を慰む可く書いたのだ。

最後に云ふ。然しながらこの通信には一句の嘘もない。總て事實である。唯事實中より好き方面のみ擇んで書いたのだ。

誠に詰らぬ通信文ではあるが、最後の第九信まで、（第九信は臨終の七八時間前に讀まれた）始終患者を待焦れしめ、喜ばしめた事を爰に明言して置く。世上幾多の非難の如きは顧みやうとも思はぬ。（七月五日東京にて）

—了—

〈病林錄〉

大正十四年九月十二日印刷
大正十四年九月十九日發行

（定價七拾錢）

編輯者　國木田虎雄

發行者　東京市牛込區矢來町三番地　佐藤義亮

發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話牛込（八〇八〇）六番　（八〇八〇）七番　（八〇八〇）八番　（八〇八〇）九番

振替（東京）一七四二番

印刷所　東京市小石川區西江戸川町五九二番　富士印刷株式會社
電話小石川　印刷者　佐々木俊一

縮刷獨歩叢書

文豪國木田獨歩の全作集也

(1) **武藏野及渚**
『武藏野』は獨歩が始めて公にせる第一の文集にして不朽の名篇。『渚』は實に其絶筆也。

(2) **獨歩集** 正宗富岡先生
富岡先生▼牛肉と馬鈴薯▼女難▼第三者▼正直者▼湯ヶ原より▼少年の悲哀▼夫婦等

(3) **獨歩書簡**
書簡數百通。其愛人に贈りて戀を語れるもの最も多く、熱烈なる戀愛書簡集の觀あり。

(4) **運命** 運命論者
運命論者▼巡査▼酒中日記▼馬上の友▼惡魔▼畫の悲み▼空知川の岸邊▼日の出等

(5) **濤聲** 鎌倉夫人
鎌倉夫人▼神の子▼少女▼帽子▼あの時分▼死▼波の音▼歸去來▼戀を戀する人

(6) **第二獨歩集** 竹の木戸
竹の木戸▼窮死▲疲勞▼節操▼二老人▼泣き笑ひ▼都の友へ▲入鄕記▲肱の侮辱

(7) **青年時代**
『欺かざるの記』の前半にして若き獨歩が惱みと欣びを以て送迎せる青春の日の記錄也

(8) **戀愛日記**
獨歩が自ら筆を執つて其烈しかりしこと火の如き戀の終始を記せる高名の告白錄也。

(9) **詩及小品集**
獨歩の詩は、實に我詩壇黎明の第一杵たりき其小品亦無韻の詩にして天才の閃光を看る

▶定價一冊金七錢▶送料六錢

・長篇小說 **神と人との間** 谷崎潤一郎著
一種不思議なる三角關係を取扱ひ愛慾の深淵に人間心理の機微を探れるもの。近時文壇の一大收穫。
圓二、〇〇 郵一〇

・長篇小說 **凡夫愛** 里見弴著
大震災を背景として、男女愛慾の葛藤を描き盡せる長篇小說。姦通を主題として心理の精到を極めた
二、五〇 郵一三

・長篇小說 **輪舞** 田中純著
中年の一文士と其の崇拜者なる一婦人との愛慾の惱みを死によつて解決するに至つた、悲痛の物語。
一、七〇 郵一〇

・戲曲集 **安政小唄** 久米正雄著
安政の大地震を點景して、數奇なる戀の姿を描ける「安政小唄」を始め、歸去來、別筵、幸福、秋立つ日。
一、五〇 郵一〇

・戲曲集 **人生の幸福** 正宗白鳥著
日本の劇壇に始めて見たる劃期的名作として喧傳された「人生の幸福」以下自信ある數篇を收めた。
一、二〇 郵一〇

・戲曲集 **玄朴と長英** 眞山青果著
青果氏の眼ざましき復活を記念する最初の第一作である。別に、「椀屋久兵衞」「淺草寺境内」の諸名篇。
一、〇〇 郵一〇

・詩劇 **死の島の美女** 福田正夫著
幻の死の島を背景として展抒する戀の三角關係を深刻なる近代的精神を以て描ける、幻想詩劇である。
一、四〇 郵一〇

有島武郎著作集（各編增版出來）新潮社出版

		定價	送料
(1)	死	八〇	六
(2)	宣言	八〇	六
(3)	カインの末裔	八〇	六
(4)	叛逆者	八〇	六
(5)	迷路	一一〇	六
(6)	生れ出る惱み	一〇〇	六
(7)	小さき者へ	七五	六
(8)	或女（前編）	一三〇	八
(9)	或女（後編）	一七〇	一〇
(10)	三部曲	一五〇	八
(11)	惜みなく愛は奪ふ	一三〇	六
(12)	旅する心	一一〇	八
(13)	小さな灯	一五〇	八
(14)	星座	一三〇	六
(15)	藝術と生活	九〇	六
(16)	ドモ又の死	一三〇	六

＊新進作家の長篇小說＊

佐佐木千之氏著 ——新刊出來——

憂鬱なる河 第一卷

▼四六判紙裝
▼價壹圓八拾錢
▼送料拾錢

雲暗く波荒き東北の自然を背景とし、敏感なる少年の、性に眼覺め世に眼覺めゆくの經路を描く。作者は最近擡頭せる新人中の新人。その新鮮にして流暢なる描寫と、その純粹にして鋭利なる主觀と、新進文壇の一大收穫たるを信ず。

中村能二氏著 ——新刊出來

默示

▼四六判紙裝
▼價壹圓五拾錢
▼送料拾錢

米大陸に流浪せる不幸なる少年が、祖國の灯を歸航の海上にのぞみつゝ遂に憧憬の土を踏み得ずに死ぬといふ悲痛なる物語。堅實精緻の描寫を、熾烈なる主觀に活した此雄渾なる大作を提げて現れた新人に人は瞠目するであらう。

若うして逝ける天才石川啄木の全集

啄木全集

——全三册

第一□小說集　處女作『雲は天才である』以下深く筐底に藏して公にせざりし作品に加ふるに、長編『鳥影』『我等の一團と彼』等其の一切の作を集む。作家としての啄木こゝに盡く。

第二□詩歌集　啄木の本領は詩歌に在り。短歌を廣く人間性に解放して生活に卽したる實感を歌ひ出でたるは啄木その人也。本篇卽ち短歌と詩の全部を收めて剩すところなし。

第三□書簡評論感想集　感想書簡の類一切を收む。彼が複雜にして深刻なりし內生活は此の篇によりて赤裸々たらん。彼が天才の片鱗隨所に閃らめくものあるを看よ。

啄木は其時代の先驅者たるに於て、その妥協し難き性格者たるに於て、其悲劇的なり し短かき生涯に於て、其業績の時代區劃的なる點に於て、其作品の斑々たる心血に彩られ、痛刻骨を刺すが如き點に於て、彼の透谷を偲ばしめ、彼の獨步を思はしむるもの の無くんばあらず。殊に、彼が先天の禀質として之を有せる社會的感情と、彼が熱情の限りを盡して謳へる民主的思想とは、透谷に見ず獨步に得ざる所にして、獨りよく我が啄木が現下の思想界に痛切なる共鳴を呼ぶ所以のものたり。こゝに其の一切の作品、及び日記書簡類を集め、全集を刊行す。近時最も意味深き出版たることを信ず。

與謝野寛　金田一京助　土岐哀果　編纂

上製一册七百頁　各貳圓五拾錢宛　郵送料一册十二錢

■年刊創作集■

小說家協會編（大正十四年版）

■日本小說集

第一集

最近の文壇に活躍せる作家二十八氏を選び、その代表作一篇づゝを採つて本集を成した。卽ち今後逐次刊行す可き年刊小說集の第一編である。思ふに、流派の錯綜と、傾向の多角と、個性の自由と、分野の濶大と、現下小說界の壯觀は曾て見ざる所、從つて色彩の豐富なること、此一卷の如きは他に其類がない。

四六判紙裝　五百頁　定價貳圓　送料拾貳錢

劇作家協會編（大正十四年版）

■日本戲曲集

第一集

現代劇文壇の代表作家十五氏の、最近一ヶ年間の作品中より代表的のものを輯めた大戲曲集で、毎年刊行を繼續し、やがて事實に於て一系の『現代大戲曲全集』たらしむる方針の下に編輯し出版するものである。なほ添ゆるに各作者の作品目錄、作品梗概等を以てし、戲曲年鑑としての利便を併せてゐる。

四六判紙裝　四百六十頁　定價貳圓　送料拾貳錢

新進作家叢書

1 新らしき家 武者小路實篤
2 恐ろしき結婚 里見弴
3 生あらば 豐島與志雄
4 大津順吉 志賀直哉
5 生と死の愛 谷崎精二
6 結婚の前 長與善郎
7 暴君へ 有島生馬
8 煙草と惡魔 芥川龍之介
9 夢と六月 相馬泰三
10 手品師 久米正雄
11 一つの芽生 中條百合子
12 神經病時代 廣津和郎
13 愛と憎み 江馬修
14 土の靈 野村愛正
15 無名作家の日記 菊池寛
16 お絹とその兄弟 佐藤春夫
17 赤い矢帆 江口渙
18 イボタの蟲 中戸川吉二
19 不能者 葛西善藏
20 霰の音 加能作次郎
21 歸れる父 水守龜之助
22 修道院の秋 南部修太郎
23 結婚者の手記 室生犀星
24 放浪者富藏 宮地嘉六
25 死を恃む女 細田源吉
26 涯なき路 岡田三郎
27 高い山から 宇野浩二
28 妹の戀 細田民樹
29 勝敗 須藤鐘一
30 櫻藤の卷 近藤經一
31 寺田屋騷動 三島章道
32 二人の文學青年 新井紀一
33 良人の貞操 瀧井孝作
34 流轉 宮島資夫
35 暖き手紙 藤森成吉
36 感謝 加藤武雄
37 蠶く 戸川貞雄
38 南國 犬養健
39 幸福の散布 横光利一
40 父を賣る子 牧野信一
41 脅威 前田河廣一郎
42 白い家と罪 宇野千代
43 夢ほどの記 佐佐木茂索
44 午前の殺人 中河與一
45 鼻眼鏡 稲垣足穂

價一册五拾錢——送料各四錢づゝ

代表的・名作選集 目次

第一 牛肉と馬鈴薯 獨歩 十六 別れた妻 秋江 冊一 啄木選集 啄木
第二 坊っちゃん 漱石 十七 はつ姿 天外 冊二 運命の丘 抱月
第三 蒲團 花袋 十八 お艶殺し 潤一郎 冊三 和解 直哉
第四 透谷選集 透谷 十九 俳諧師 虚子 冊四 末枯 万太郎
第五 春（全二冊） 藤村 二十 煤煙（全二冊） 草平 冊五 善心惡心 里見弴
第六 わが袖の記 樗牛 二十一 たけくらべ 一葉 二十二 子規選集 花枕 子規 冊六 俊寛 菊池寛
第七 第八 爛れ 秋聲 二十三 その妹 實篤 冊七 將軍 龍之介
第九 平凡 四迷 二十四 旅役者 幹彦 冊八 涓滴 鷗外
第十 高野聖 鏡花 二十五 物言はぬ顔 未明 冊九 泉谷集 武郎
十一 何處へ 白鳥 二十六 ふところ日記 眉山 四十 蝙蝠の如く 生馬
十二 今戸心中 柳浪 二十七 鱧の皮 小劍 四一 子をつれて 善藏
十三 耽溺 泡鳴 二十八 女役者 俊子 四二 白秋詩歌選 白秋
十四 明治詩歌選 六家 二十九 南小泉村 青果
十五 戀ざめ 風葉 三十 少年行 星湖

羽二重表紙・菊半截特製
價五拾五錢・郵送料六錢

文壇諸家の主張感想と、其生活ぶりを窺はしむ可き隨筆の集。

感想小品叢書

(1) 我が文藝陣　菊池寛氏著
(2) 泉のほとり　正宗白鳥氏著
(3) 微苦笑藝術　久米正雄氏著
(4) 七寶の柱　泉鏡花氏著
(5) 草原　武者小路實篤氏著
(6) 白醉亭漫記　里見弴氏著
(7) 文學的散歩　宇野浩二氏著
(8) 百艸　芥川龍之介氏著
(9) わが小畫板　加藤武雄氏著

一冊壹圓二十錢◇送料八錢

516
378

終